



槻の若木

〒339-0054 岩槻区仲町1-14-35

電話：048-756-0254

FAX：048-758-7483

HP：<http://iwatsuki-j.saitama-city.ed.jp>Mail：iwatsuki-j@saitama-city.ed.jp

「一尺の井戸」の教え

校長 小林 成行



夏休みも終わり、真っ黒に日焼けした皆さんの顔を見ることができ、うれしく思います。2学期は色々な意味で自分を高める大切な学期です。そこで、今回は「一尺の井戸」のお話を紹介します。『一尺の井戸』と言われても、何のことかわからないと思います。これは、ある地域の人々に昔から伝えられてきた教訓なのです。その内容とは……

その地域は、武蔵野台地の南西部にあり、高低二つの大地が広がっています。もともと、この地域のあたりは、水の少ないいわゆる乏水(ぼうすい)地域なのです。灌漑(かんがい)に必要な水を十分に手に入れることができず、水田の面積もわずかで、それも質が悪かったそうです。そして、大半の地域では、地下水面がおおむね10m以上の深さにあります。このように地下水面が深いことが、このあたりの開発が遅れた大きな原因だったのでしょう。そのため、井戸を掘るといことは、当時の技術や経済の上から全く困難だったのです。せっかく開墾しても、2kmの道のりを水汲みしなければならなかったため、脱落していった人が多くいたそうです。そのうえ、冬から春先にかけて台地の上を吹きまくる北西の季節風です。作物は風に吹き飛ばされ、風の強いときは畑で作業するのさえ困難だったようです。



それでも、どの農家も井戸を掘って水を確保する努力を一生懸命してきました。井戸水が出るか出ないかは農家にとって死活問題でした。それだけに、どこの農家でも井戸掘りに必死になったそうです。いくら掘っても水が出ないところもあたり、そのため一家離散してしまった家もあったそうです。

数々の苦心と多くの人たちの努力によって、さしも困難を極めた畑地の開墾もしたいに地につき、その面積は増加していったそうです。このような生活の中から人々の間に、あと一尺(約30cm)も掘り進めれば地下水にぶつかるかも知れないのに、あと一尺のところまで努力をあきらめてしまったために、今までの苦労が全部無駄になってしまい、何もしなかったのと同じになってしまったことを、『一尺の井戸で泣きを見るぞ』という教訓になって、先祖代々受け継がれてきたのです。昔から農家の生活は厳しく、ともすると苦しさの余り心がくじけて、苦しさを避けて通ろうと思うことが何回もありましたが、そんな時『一尺の井戸』の教訓を思い出して、歯を食いしばってきたのでした。

私はこれらから、当時の農家の人々の努力、粘り強さをひしひしと感じました、今の私達の生活の中にも、これと同じことがないでしょうか。生活が豊かになって、欲しい物が何でも手に入る、そんな生活に慣れてしまっていて、努力することを忘れてしまった人がいたとしたら困ったことだと思います。試験勉強も運動も同じです。精一杯勉強(練習)して、残念ながら落ちて(負けて)しまった場合、その原因はあと1時間の勉強(練習)を怠ったからかもしれません。あと一尺の努力なのです。頑張りましょう！もし弱い心が頭を持ち上げてきたら『一尺の井戸』を思い出して欲しいと思います。

◎ 柳生但馬守宗矩 (やぎゅうたじまのかみむねのり) という 剣豪の極意書 の言葉

「井を掘りて、今一尺で出る水を 出でじと捨てる人ぞ悲しき」

柳生但馬守宗矩・・・江戸時代初期の武將、徳川将軍家の剣術師範で柳生心陰流の地位を確立した。

(意味) 素人が苦勞して井戸を掘っているのだが、なかなか水脈が見つからない。そこで投げ出してしまおうのだが、投げ出した深さはあと一尺も掘れば水が出るころまで来ているのに、なんてあさはかなんだろう・・・と、なげいている歌。